Steve Striffler,

In the Shadows of the State and Capital: The United Fruit Company, Popular Struggle, and Agrarian Restructuring in Ecuador, 1900-1995.

Durham & London：Duke University Press, 2002, xii＋242pp.

新木秀和（あらき ひでかず）

I

バナナは発展途上経済における代表的な熱帯産品である。世界経済において重要な位置を確立したのは主として20世紀以降のことであり，その生産・流通・消費の過程で農場生産における労働問題や世界市場での多国籍企業の支配が如実に観察されることから，開発論などの実証研究やフェアトレードなど社会運動の対象となってきた。そうした特徴に応じて，バナナ産業は現代世界の社会経済発展における低開発の問題や，南北問題ないし南南問題の文脈の中で研究対象として取り上げられる傾向が強い。熱帯産品の中で砂糖やコーヒーが歴史研究の対象となるのに対し，バナナはむしろ国際関係や経済学の分野で現代世界の諸問題につながるテーマとして議論の対象となる。そしてバナナ産業への多国籍企業の支配を問う研究が中米諸国などを対象になされてきた。冷戦崩壊後の1990年代以降は，従来の企業研究や労働―資本関係の研究にジェンダーやエスニシティの要素が加味され，バナナ産業の労働現場における労働者の生活状況にも目が向けられるようになっている。

こうした状況の中で，本書はいかに位置づけられるだろうか。本書はエクアドル海岸部のバナナ農園（グアヤキル〔Guayaquil〕市から100キロメートルほど南のテンゲル〔Tenguel〕地区を中心とするバナナ生産地帯）を対象にユナイテッド・フルーツ社（以下UF社と表記）の進出と撤退の歴史的経緯と，それをめぐるUF社と国家と労働者の３者のダイナミックな相互関係を，労働現場からエクアドル国内，そして国際関係の動向の中で綿密に分析した研究書である。一次資料として様々な歴史資料（UF社の通信文，駐エクアドル米領事館の通信文，エクアドルの全国紙や地方紙など）が活用されるだけでなく，労働者や管理者，UF社関係者を含む多数の人間から証言を得るという方法も動員されながら，事実関係の冷静な分析と多面的で活き活きとした歴史叙述の融合が試みられている。1900年から95年までという長期の変化を跡づけつつ歴史と現在をつなぐことにも配慮されているので，本書は，ラテンアメリカにおけるバナナ産業の現代史としてもエクアドル現代史としても読むことができる。

本書は博士論文（1998年提出）を発展させた著作である。著者スティーヴ・ストリフラーは，本書出版データによれば，アーカンソー大学助教授として人類学とラテンアメリカ研究を担当している。彼は1994年からの数年間にエクアドルでの文献調査だけでなく，本書の舞台となる太平洋岸南部のバナナ地帯（かつてテンゲル農園があった地区）などで多くの関係者から聞き取り調査も精力的に行った。また米国内にあるUF社のアーカイブズを精査して歴史データを収集するなど，その調査方法は綿密を極める。著者は現地での観察を細部の描写に活かし，そして人類学に歴史学の手法を応用し，歴史人類学ないし歴史社会学的なアプローチから，バナナをめぐる歴史のダイナミズムを浮き彫りにしようと努めている。このようにして書かれた本書は，エクアドル海岸部のテンゲルというバナナ・アシエンダ（農園）を舞台に20世紀における農業をめぐる資本主義的変容の過程を，多国籍企業，エクアドル国家，および地元の農民の３者の相互関係として描く。本書の舞台となるのはエクアドル海岸部で，グアヤキルとマ

チャラ（Machala）の間に位置するテンゲル＝バラオ（Tenguel-Balao）地区であり，この地区は輸出経済期にはカカオの主要生産地であったが，UF社の時代とその後を通じて世界有数のバナナ生産地帯となっている。

Ⅱ

本書の構成は次のとおりである。

第１章　資本主義的変革
第１部　プランテーションの世界
第２章　バナナボーイズ，エクアドルへ来る
第３章　エンクレーブの誕生――労働のコントロールと労働者の抵抗――
第４章　エンクレーブの周縁で――国家，資本，および共同体の形成――
第５章　新世界のイメージ
第６章　エンクレーブの終焉
第２部　契約農業の出現
第７章　労働者から農民へ，またその逆へ――エンクレーブの中核における農地改革――
第８章　闘争から運動へ――抗議の拡大と共同体形成――
第９章　国家，資本，および民衆闘争の再編成
第10章　労働者を求めて――契約農業と労働組織化――
第11章　結論

以下，内容にそくして本書の特徴を紹介したい。

まず全体の序論となる第１章で著者は，グローバルな資本主義の発展過程における農業部門の変容を「資本主義的変革」として分析する。20世紀における資本主義の変容については，経済（工業）部門のそれはフォーディズムからポストフォーディズムへの移行として理解されるが，これを農業部門にも適用させ，外資所有のエンクレーブ（large foreign-owned enclaves）から契約農業（contract farming）への移行と等値させてしまうことに異を唱えている。しかも，契約農業の成立に関する歴史分析が少ないので，その過程において果たした民衆闘争の役割を理解しそれを評価しようとする試みが乏しい，と著者は認識する。グローバルな変容に対する民衆の反応を視野に入れる研究はあっても，民衆の行動がいかにグローバルな変容を促したかについての分析がほとんどないという問題を提起し，それには歴史的分析と人類学的分析を融合する必要があるが，そうした試みはわずかだという認識が示される。

かかる前提から，本書の目的が示される。つまり，エクアドルのバナナ栽培農民が，民衆闘争を通じて，グローバルなバナナ産業における生産，商業化，および蓄積の広範な過程を決定づけたことを示そうとすることにある。換言すれば，資本主義という経済過程の中核に政治を位置づけることで資本主義の政治社会的内容を明らかにすることであり，それを通じて資本，国家，および階級闘争のような抽象概念を具体的な実態として把握しながら，従属論や世界システム論などの想定よりもはるかに複雑な資本主義の実態への理解を深めることにある。

本論は２部に分かれる。第１部（第２章～第６章）はUF社の進出（1934年）から撤退（62年）までを中心に20世紀初頭から60年代初頭までの時期を対象とし，第２部（第７章～第10章）はUF社撤退後に成立する契約農業のもとにおける労働者の闘争を現代（95年）までの時間軸で扱っている。多国籍企業の直接支配によるバナナエンクレーブ（飛び地）の形成から崩壊までの歴史過程が前者の対象だとすれば，後者では契約栽培方式の導入と定着に焦点が当てられる。各部には序論がつき，それぞれの分析目的や歴史的背景などが述べられている。以下，順に内容を述べる。

第２章では，UF社の代理人と駐エクアドル領事館の通信文を使いながら，UF社がエクアドルに到来し1934年にテンゲル農園を購入する経緯が述べられる。第三世界への「外国資本」の「進出」とは何を意味するのか我々に考えさせる内容である。19世紀末から1920年代にかけてエクアドル海岸部はカカオ輸出経済の活況を迎えたが，当時のエクアドルへの進出は，中米における「バナナ帝国」とはいささか異なるUF社の戦略を背景にしていた。

第3章では，元労働者，管理人など100名以上の関係者とのインタビューに基づき，エンクレーブの形成過程におけるプランテーションの状況が描かれる。UF社の進出は未開の土地に物資と人を導き入れることで，民衆組織や労働統制システム，および国家介入の形態を生み出した。バナナ農園の労働者とその家族について労働だけでなく家庭生活の諸相が述べられ，労働者の生活実態まで踏み込んでプランテーションの内部状況が描かれているのはとても興味深い。もともと未開の土地であったところにコミュニティの外観を持つ農園が切り開かれた訳であり，農園には雑貨店，学校，教会，映画館，社交クラブ，スポーツチームなどの社会施設が整備されていた。UF社の戦略として，農園労働をめぐる基本的単位は夫婦を軸とする核家族（familia nuclear）とされ，独身の単独労働者でなく男性既婚者が好まれ，労働者の配偶者である妻は家庭を支える存在だと見なされていた。それはパターナリスティック（家父長的）な支配システムというべきものであり，UF社は「慈悲深い父親のような」（como un padre benévolo）存在とのイメージをつくり出そうという戦略であった［Striffler 2000, 162］。

1950年代末から60年代にかけての時期はしかし，バナナの疫病であるパナマ病が蔓延してバナナ生産が大打撃を受け，また当時の政治的不安定状況や労働運動の勃興により，テンゲル農園にも荒波が押し寄せた時期である。その後，UF社によるこのシステムが，労働争議や抵抗の火種に転化していったのは一種の皮肉ともいえる。

第4章では，農園をめぐる土地問題が取り上げられ，ラ・インデペンデンシア地区におけるモジェポンゴ・コミューン（Mollepongo Commune）とその農民たちによるUF社に対する闘争に焦点が当てられる。その紛争でエクアドル国家が果たした役割も分析の対象となり，著者はUF社内部でやり取りされた書簡を基本資料としている。

第5章では，もうひとつの争点となったシュミラル農業コロニア（Colonia Agrícola Shumiral）が俎上に載せられる。1950年代末，このシュミラルで発生したテンゲル農園の占拠闘争は農園の統合を突き崩し，UF社の経営続行に大きな痛手を与えた。

第6章では，新聞記事やインタビュー証言を交えながら，労働者たちがついにテンゲル農園の中核部に侵入することでエンクレーブを解体させ，UF社にエクアドルからの撤退を余儀なくさせた1962年の農園侵入事件の状況が述べられる。当時はエクアドルで農地改革が行われようとしていた時期であり，この事件が地元および全国レベルで農地改革の実施を促した経緯にも言及する。

続いて第2部では，間接的統治といえる契約栽培方式（contract farming）が導入され展開した過程に本論の議論が移される。1960年代半ばから90年代半ばまでが第2部の対象時期である。

第7章ではテンゲル農園の中核部における農地改革の状況が分析され，労働者たちが土地を獲得したものの，やがてその大部分を国内資本家に譲り渡さざるをえなかった経緯が明らかにされる。この章でも，農地改革の報告書や裁判記録に加え，労働者からの生の声が記述に活かされている。

第8章と第9章では，モジェポンゴおよびシュミラル両地区の周縁部を舞台として，1960年代から70年代にかけて農民たちが組織を形成し，土地占拠という形の示威行為を通じて，政府に農地改革の実施を訴えた農民運動の経緯が述べられる。

第10章では，現行の契約栽培制度の特徴，とくに民衆の闘争と組織化に対するその意味が分析される。黒斑点病（シガトカ・ネグラ）に強いキャベンディシュ種バナナの導入と軌を一にして，1970年代半ばに契約栽培方式が取り入れられると，この制度のもとでUF社などの多国籍企業は，生産過程のコントロールから手を引き，直接生産に伴うすべてのリスクを地元の農園主たちに負わせるようになった。そしてこの農園労働は，かつてよりも低賃金を余儀なくされ組織化されない労働者たちが担っている。労働とアイデンティティの関係という点でいえば，現行の契約栽培制度のもとにおける農園労働者は常雇い（full-time）ではない臨時雇い（temporary）であるために労働者というアイデンティティを確立しづらく，また男性化された労働のもとで女性も労働者というアイデンティティを持てなくなっているとい

う。UF社を追い出すことに成功した農民や労働者たちが，土地を獲得したのもつかのま，やがてその土地を手放し，地元の新興資本家層によるバナナ農園で，新たな契約栽培制度のもと，より劣悪な労働環境に置かれるようになった過程には，成功と失敗の紆余曲折が刻まれている。

最後の第11章で著者は，全体の結論として，農業研究における本書の意義と貢献についてまとめている。それに続く最後の部分に，本書の全体的な結論が述べられる。

Ⅲ

次に本書の意義について考察したい。そのためまず，本書の最後にある「結論」における著者の議論を紹介しよう。著者は，1960年代と70年代の農業部門研究（agrarian studies）では，経済決定論的なアプローチが主流であり，それには歴史的にも政治的にも分析が欠如していたとする。こうした研究があまりに構造主義的（厳密で静態的で非政治的）であるとして1980年代の新しい研究はジェンダーやエスニシティなどにもメスを入れたが，構造に反対するあまり，農民や労働者などのサバルタン（被抑圧層）のエージェンシー（主体性）を持ち上げすぎたきらいがある。そうした反省に立って，著者は，二分法（構造かエージェンシーか，経済か政治かといった二律背反的思考様式）を避けながら，構造の中にエージェンシーをエージェンシーの中に構造を位置づけ，また政治の中に経済を経済の中に政治を位置づけようと試みる。すなわち，資本主義やその変容過程におけるサバルタン集団や国家の役割を正当に評価する必要があり，そのためには，資本とか国家というものを抽象的な構造としてではなく，人的なアクター（human actors）として（つまり特定の資本家，企業，省庁，機関，役人のように）捉えて分析し，それらと農民や労働者のようなサバルタン集団との間に展開される紆余曲折の（uneven）相互関係／相互作用を捉えるべきだとしている。

著者が強調したい点は，資本主義や国家の変容過程において農民や労働者の行動が果たす一定の役割に注目し，たとえ結果的に「失敗した」行動ですら，それらの変容過程を方向づけるような面があるし，彼ら／彼女らのその後の行動を生み出す基盤となることもあるという事実のようだ。このような確信から著者は，農民／労働者の闘争をUF社を追い出した「成功」の物語にとどめず，その後の過程（国家による農地改革とその挫折，契約栽培方式の導入による生活・労働環境の劣悪化という矛盾した結果）における「挫折と喪失」の物語としても把握し，歴史過程の紆余曲折を描き出そうとしているのである。こうした姿勢を評者は積極的に評価したいと思う。ただ本書のように，証言を各所に盛り込んだ研究書としての叙述が，読書をいささか難しくしていることも同時に指摘しておきたい。

20世紀半ば以降に世界最大規模のバナナ輸出国となったエクアドルだが，北米市場での競争相手であるコスタリカやコロンビアと比べると，ヘクタールあたりの収量が少ないだけでなく，輸出の単価も低いとの特徴を持つ。これはいくつかの要因による。ひとつは生産コストが低いこと。1990年代の後半には通貨スクレが大幅に切り下がり，ドル換算で人件費が大幅に減少した。また，バナナに大きな被害をもたらす黒斑点病が気候条件の違いにより中米に比べて繁殖しにくく，この病気を抑えるための農薬散布の頻度が少なくてすむ。２つ目は中米諸国に比べて20ヘクタールから数ヘクタールの中小規模の生産者が多く，収量向上のための技術導入が進んでいないこと。さらに生産が急拡大した1980年代末には必ずしもバナナに適さない土地にも生産が広がった。３つ目は主要な市場である北米市場への輸送コストが中米に比べて高いほか，ドール，チキータ，デルモンテといったバナナの国際市場で大きな力を持つ多国籍企業が中米の自社農場からのバナナの販売を優先し，供給が過剰な場合にはエクアドルで買い付けるバナナの価格を引き下げるためである（以上は清水〔2002〕を参照）。

評者はかつて，地元の民族系企業グループの事例分析に基づき，エクアドルのバナナ産業では相対的に米系多国籍企業の影響力が小さく民族系資本の比重が大きいことを明らかにしたことがある［新木

1996]。しかしその分析では，民族系資本の出現に先立つUF社の歴史的役割や，UF社の撤退をめぐる民衆闘争の経緯などについては中心的課題にすることができなかった。また民族系企業の位置づけを強調することで，実際にはUF社の撤退後も，直接統治から契約栽培方式への移行を通じて多国籍企業の間接的影響力が維持されてきた点を，結果として過小評価することにつながったきらいもある。この意味で評者には，本書のアプローチがバナナ産業への新たな側面を提示してくれ，大変興味深い。つまり，本書における歴史人類学的な手法による資本，国家，労働の3者間の動態的な分析は，エクアドルのバナナ産業の様態を20世紀という長期のスパンで捉え，世界市場や資本主義世界におけるその位置づけを浮き彫りにすることに効果を発揮している。

前述したように，バナナ産業の研究は低開発の問題や南北問題との関連で取り上げられ，とくに典型的な見解として中米諸国における米系多国籍企業の支配が分析と非難の対象になってきた。冷戦崩壊後は労働現場（農園，加工と輸出）における労働者のエスニシティや生活状況も議論の対象になっているが，バナナ産業の研究＝多国籍企業の実態解明という従来の基本的視角は大筋で維持されているように思われる。

周知のように日本における研究にも同様の傾向がうかがえるが，日本の場合はより実践面と密接な関係を持ちつつバナナ研究が進められてきた傾向がある。代表的な著作として鶴見（1998）に注目すれば，同書に所収の「バナナと日本人」などアジアを主たる題材にした一連の研究が，生産者と消費者の関係やその間に介在する巨大資本の支配を抉り出すことで，消費者運動や社会運動にも大きな影響を与えてきたことが知られる。その後生まれたネグロス島キャンペーンのように，日本の場合は，対アジア関係やフェアトレード振興という文脈で，バナナ研究が実践的な意味を持ってきたことが特徴的である。

付言すれば，日本のバナナ研究やアグロインダストリー研究には，いまだアジアやラテンアメリカなど別々の地域を横断するような本格的な総合研究が乏しいことも確かであろう。この意味において今後は，「バナナと日本人」で描かれた世界と中米やエクアドルのバナナ産業の世界をつなげて把握したり，同時に開発やグローバル化などのテーマの再考にもつながる分析を行なうことが必要となるであろうし，それを通じて我々の視野を広げ世界認識の理解を深めていくことが要求されよう。

また本書では明解に述べていないが，国家の役割について著者は，*Ecuador Debate* 誌（エクアドルの学術雑誌）に発表したスペイン語論文「階級・ジェンダー・エスニシティ――ユナイテッド・フルーツ社，『テンゲル農園』，およびバナナ産業の再編――」［Striffler 2000］の中で，次のようにまとめている。すなわち，UF社の時代（1934～62年）には「不在」で特徴づけられたエクアドル国家は，UF社撤退後にはテンゲルなどバナナ生産地に対し様々な形で関与し，その「存在」を示すようになった，と。時期的な一致もあり，UF社によるテンゲル農園からの撤退はエクアドルにおいて農地改革が開始される大きな契機となった。軍事政権のもとではあったが，1960年代後半から70年代にかけて土地問題や農業問題への関与を通じて国家が，テンゲル周辺のバナナ生産地帯の問題に関わるようになる。そして民政移管後の1980年代以降は農地改革から農業振興への方針転換もあり，エクアドル政府は，地場生産者に対する輸出政策および資金援助政策を通じて契約栽培制度の維持に努めてきたばかりか，その制度のもとで国家は，労働者が組織化せず孤立したまま労働再生産を行うように，資本家層（農園主）に対する支援を図ってもきたのである。本書の事例研究からはこのように，資本主義の変容過程における国家の位置や役割が読み取れ，それが外資（多国籍企業）の影響力の形態と程度にも関係していることが浮き彫りになる。そこで明らかになった特徴は，従属論や世界システム論の前提よりも，むしろ国家と資本の相互関係を重視する連携発展モデルの方に近い，資本主義的な発展と変容の過程であろう。

Ⅳ

しかしながら，本書にも一定の限界があることを

指摘しなければならない。

かつてバナナ産業を基軸とするエクアドルの企業グループを分析し，民族資本の役割に注目したことのある評者は，本書においてそうした民族資本の役割への言及がほとんど見られないことに，いささかの不満を感じている。もちろん，テンゲル＝バラオ地区に論点を限定すれば，民族企業が視野に入ってこないこともあるだろうが，同時代的状況としてあるいはバナナ産業の展開状況の面からも，産業の多角的な分析により踏み込んでほしかったと思う。もっとも逆にいえば，本書のような多国籍企業と国家と民衆闘争の詳細な関係史をくぐり抜けることで，評者が試みた民族資本の役割の分析はより鮮やかに浮かび上がってくるように思われる。この点で，本書は評者の視野を広げてくれる作品となった。

また，ないものねだりの注文をすれば，本書には地図が２つ掲載され，舞台となるテンゲル＝バラオ地区の略図も入れられている。本書の各章で出てくるいくつかの農園名や土地名などの位置関係がある程度わかるようになっているが，しかし，その図はいつの時期のものか判然とせず，どちらかといえば，半世紀近くにおよぶ農園等の名称が時代別ではなく載せられている。このため，本来重視されるべき時期的な変化が地図からは読み取れなくなっている。歴史過程を丁寧に追うのであれば，時期ごと（あるいは章ごと）の地図を何枚も入れて変化を視覚的にも表現すべきではなかったかと思われる。また地図に描かれない地名等もあり，選別の根拠は自明とはいえない。かつて，テンゲルの近くを通過しつつグアヤキル市からマチャラ市（バナナ輸出の拠点のひとつ）まで太平洋岸の道路を乗合タクシーで旅をした評者だが，バナナ生産地帯の広大な「緑の森」が続く風景の中では，人間の居住地の位置関係を示す地名やそれらが記された地図の大切さを実感しただけに，本書を読み進めながら「緑の魔境」に迷い込んだような感じがぬぐえなかった。まして，現在から40年ほど前（1962年）に解体したテンゲル農園であってみれば，かつての領域範囲を知るためにも地図の整備は欠かせないであろう。さもなければ，著者のように自らの足で歩き回り，当時の証言を集めようとするまで，テンゲル農園は具体像を結んでくれないのではなかろうか。この点に関してさらにいえば，本書には１枚も写真や挿画が使われていない点も残念である。テンゲル農園かUF社か何かの歴史的ないし最近の写真が１枚でもあれば，読者に視覚的な情報やイメージを伝えることができ，本書の叙述が一層活き活きと読みとかれるにちがいないからである。

以上，いささかの難点も指摘したが，総じていえば本書が歴史研究に新たな貢献をしたことはまちがいない。人類学的な手法を兼ね備えることで，歴史分析に綿密さと動態が付与される結果をもたらしたのは本書の特長といえよう。バナナという産品から20世紀における資本主義と国家と労働の関係を考えるため，そして開発におけるグローバルな資本の展開とローカルな労働現場の相互作用に関する洞察を深めるためにも，本書が提起する視点は有効であり，今後とも本書は基本文献として参照され続けるであろう。

文献リスト

＜日本語文献＞

新木秀和 1996.「エクアドルのバナナ産業と企業グループ」星野妙子編『ラテンアメリカの企業と産業発展』アジア経済研究所.

清水達也 2002.「構造改革で競争力強化を図るエクアドル農業」『ラテンアメリカ・レポート』19(2)（11月）.

鶴見良行 1998.『バナナ』「鶴見良行著作集」第６巻 みすず書房.

＜スペイン語文献＞

Striffler, Steve 2000. “Clase, género e identidad: la United Fruit Company, 'Hacienda Tenguel', y la reestructuración de la industria del banano.” *Ecuador Debate 51* (diciembre) 155-178.

（神奈川大学外国語学部専任講師）